

# 塀の中め

プレイ  
ボール  
安部讓二



講談社

安部讓一

塀の中の  
プレイボール

講談社

# 塀の中のプレイ・ボール

一九八七年三月二〇日 第一刷発行  
一九八九年一〇月二〇日 第一四刷発行

著者——<sup>あべじょうじ</sup>安部譲二

© Joji Abe 1987, Printed in Japan

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京〇三—九五一二二（大代表）

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——株式会社黒岩大光堂

定価——一〇三〇円（本体一〇〇〇円）

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛に願います。

目次

塀の中のプレイ・ボール

5

大遠投

31

アンプル時代

61

指

79

塀の中の異邦人

101

飛び魚ミミのこと

113

白い仔猫の用心棒

135

早朝出所

171

あながき

207

装 装  
幀 画

熊 村  
谷 上  
博 豊  
人

# 塀の中のプレイ・ボール



# 塀の中のプレイ・ボール





「明日の、火曜日から第一運動場だ」

大音響の木工場の中を、作業帽にこの男だけ黒い線を一本巻いている囚人頭が、主だった古手の懲役の耳に口を寄せては叫ぶ。

百人ほどの懲役が、白い運動靴の他はグレイずくめの作業衣で、それぞれ回転鋸で材木を切ったり、電気ハンマーを響かせて整理ダンスに釘を打ったり、椅子の脚にする棒を研磨機にセツトして、サンドペーパーで磨きを掛けたりしている。

小肥りで中年ヤクザの囚人頭は、恐ろし気な刃物傷のある頬に微笑を浮かべ、弾むような脚どりで廻って歩き、機械の立てる音に加えて木屑を吸い取る集塵機が回りっぱなしの工場で、

「明日の、火曜日から第一運動場だ」と叫んでいるのだ。

耳元で叫ばれた懲役は、その途端に目を輝かせ、火の気もないコンクリ造りの板敷きの舎房で永い冬に痛めつけられ、青味がかってくすんでしまった顔面にほんのりと赤味を浮かべ、あ  
る者は短い言葉に万感を籠める感じで、

「ア、そう」

と眩き、ある者は遠くを見るような目になって、ただ無言でしきりに首だけ上下に振る。

囚人頭に耳打ちされた古手の懲役は、部下の懲役の耳に同じ言葉を叫び、間もなく木工場全体が大騒音の中で明るさを増し、華やいでいった。普段はちょっとした私語にも口うるさい工場担当の看守も、事情を知っているから、流石は停年間近の老練さで、知らぬ顔を決めている。

何時の時代に誰がこの優雅な規則を決めたのだろう。前時代の定めや用語が、時代に関係なく用いられ続け、守られ続けている刑務所に、これだけはむしろ英国風とでも言いたいような「運動時間」が定められている。半日の土曜日と「免業日」の日曜、祝祭日を除くウィークデ  
イの毎日、工場では作業を中断して、全員を運動場に出す。普段の日は三十分。週に一度は広い第一運動場を使って正味四十五分、運動をさせるのだ。冬の間は、霜で第一運動場は使えなくなってしまうので、懲役は仕方なく、工場の間の敷地を利用して作った小さな運動場で、日溜りがあれば、そこにしゃがみこんだりして、運動時間を過す。

「明日から第一運動場を使う」

と言う報らせは、懲役が熱中するソフトボール・シーズンの開幕のベルだった。辛い冬が完全に過ぎて、春が確かに来た、ということなのだ。

「運動部員」と呼ばれる係りは、強盗罪で五年の刑をつとめている、色白で長身の、これが強盗かね、と誰でもが首をかしげる穏やかな顔相の蓮見と云う懲役だ。これが厚紙を持ち、工場の中を廻って、

「ソフトボールやりたい人は名前を言って下さい」

と、希望者の名前を厚紙に書き込んで行く。

工場の隅で鋸の目立てをやっていた水田順一のところに、蓮見は一番最後にやって来た。ここはこの工場の作業場では、それでも一番音の静かな所なのだ。

「水田さん。希望者は自分と水田さんで、ちょうど二十七人。三チーム、ピタリですよ。監督には水田さんと花村さん、それに吉川さんをお願いします。今日の昼休みにこの希望者リストをカーボンで取っておきますので、御三方でドラフトをやって下さい。自分は水田さん、採ってくださいすよね」

蓮見は、厚紙に書き込んだリストを水田の前に差し出すようにして、顔を覗きこむ。

「ウン。まあドラフトだから、『必ず』ってわけには行かないけど、君がレフトを守ってくれば、これは安心だからな。こうやって見ると、冬の間に随分、この工場も顔ぶれが変わったな

あ。去年の秋のメンバーは俺と君を入れても十人だぜ」

東京のヤクザで、傷害の他三つの罪名が併合されて四年喰った水田は、少年の頃、高校でサッカーをミッチリやったと言うだけあって、四十歳の誕生日をつい去年の暮に迎えたにしては、キッチリ締った、まだ充分スピードを秘めた身体をしている。

木工場は他の工場と違って、仕事の性質上、金槌や刃物がそこいら中にあるので、刑務所側では新入の懲役の中から、穏やかで精神状態の安定している者を、慎重に選んで、配役する。懲役同士の喧嘩ならどうということはないのだが、間違って頭の安いのや安全装置のこわれたのを配役してしまうと、これは仲間の工場担当の生命に直接関わってしまうことになる。

刑務所は懲役も生命懸け、看守も生命懸けなのだ。水田も刑務所のお眼鏡にかなった懲役の一人で、年功のいったヤクザだが、堅い気の、懲役にも威張り散らさず、同業のヤクザに対するのと同じ様子で接するので、堅い気の泥棒達や蓮見のような懲役に人望がある。

「先週、落ちて、来た、この三浦って男。キャンパスの木枠を組立てている、目立たない小柄な奴ですが、前刑では、青森刑務所の懲役選抜チームのセカンドで、トップを打ったそうです。来賓の、法務省の局長の前で看守チームとやらされて、甲子園で二回戦まで行ったピッチャーや、プロの二軍で四年やったサードが居たりで、八対ゼロだか、十対ゼロだか、とにかくコテソコテンに勝っちゃったんだそうですよ。刑務所の威信に関わるとかで若い所長は青筋を立てるし、発案者の保安課長は血圧でぶっ倒れたんですと……」

「その青森の野球の件なら、娑婆で聞いたよ。いい気分で見守のチームをコテンパンにやっけちまったんで、やらしておくからこんなことも起るって、それから殆んどの刑務所で軟式野球は懲役にやらせなくなっちゃったんだそうだ」

今では懲役がふざけて四ツに組んだだけで、懲罰になる相撲にしたって、ずっと以前はたいてい全国どこの刑務所でも、運動時間にはドンドンやらせたものなのだ。それが、誰か強い懲役が、どこかの刑務所で、柔道や逮捕術を毎日やっている看守の、薄でかい連中をまとめて端から全部投げ飛ばしてしまっただけから、喧嘩の原因になるとかなんとか、たちまち屁理屈くっつけて禁止にしてしまった。

「何時も威張りくさってるから、懲役のやってるの見て、つい馬鹿な勘違いして、『東京の本省から来た偉い人や、地元の市長なんかの前で官の力を見せましょ』なんて阿呆な所長や課長が思いつくたびに、逆にコテンの目に会わされて、それでひとつずつ禁止になっちゃう訳よ」

「この三浦の話は、聞いてたのが、文化部員の山根と散髪係の金だけだったので、直ぐ口を止めておきました。この工場には、その頃、青森でつとめたのが誰もいないし、あいつは小柄で目立たないので、花村さんも吉川さんも上位では指名しないでしょうから、楽に採れると思いますよ」

「そうか、有り難う」

水田と蓮見は顔を見合すると、口を開けて楽しそうに笑った。

「甲州とオイニが、出所と喧嘩で居なくなつたんで、ピッチャーはヒョロヒョロダマの金庫破りの忠さんだけだな。新人は投げさせて見なきゃ分かんないもんな。話ばかり大きくてよ」

水田が厚紙を見て云う。

速いボールでコントロールも抜群だった甲府の痴漢が、二年の刑を満期で正月に出所してしまい、もう一人、スピードの変化で、うまいピッチングを見せた栃木のオイニは、その仇名の由来である凄い腋臭のニオイを、同房の懲役に嫌味をたれられ、元旦の夕方、派手な殴り合いを舍房でやって、たちまち懲罰房に放り込まれてしまったのだった。

「この鈴木ってのは、自分と少年院が一緒で、もう十年以上も前のことですが、少年院のソフトボールで一番早いボールを投げるピッチャーでした。覚醒剤で大分痛んでるようなんで、訊いて見たら、まだまだ大丈夫だろうって笑ってましたっけ。この話も、花村さんと吉川さんは知っちゃあいせん」

懲役ソフトボールのドラフトは、古いソフトボール好きの懲役が、運動部員に指名されて監督になり、監督同士がジャンケンをして勝った監督から順に、希望者リストの中からこれと言うのを自分のチームに採って行く。一巡毎にジャンケンと言う定めなので、監督達是一所懸命に汗の玉を浮かせて、九回ジャンケンをするのだ。程度の悪い懲役の集っている工場で

は、もうこの段階で、後出した、なんだと殴り合いが始ったりする。

プレイする選手も、見物専門の懲役も、それぞれ虎の子の石鹼やタオル、塵紙に運動靴といった、看守の目を盗んで蓄えた私物を賭けるので、これはもう娑婆の鉄火場以上の興奮、エキサイトメントなのだ。

石鹼やタオルの私物が刑務所の通貨で、沢山あれば、娑婆の金持と同じ、なければ乞食と一緒だ。

昼飯を終えると、三人の監督は工場の食堂に残り、運動部員の蓮見が用意した希望者リストを片手に、拳骨を出し、蓮見を立合人にしてドラフトを始める。

花村は肥って貫禄充分の四十五歳のテキ屋。吉川は顎のしゃくれた細い顔に金ぶちの眼鏡をかけた、三十八になる関西系の事件屋だ。花村は不法監禁と暴行でくらった三年の刑が、あと四ヵ月で満期になる。吉川は四年の刑を丁度半分つとめたところだが、何で来たのか、自分の罪名や事件の話をしたがらない。

「知らん名前がギョーサンでんな。ま、若うて、カ、ダ、ラ、のええのん選べば、棒も利きますやろて……」

吉川が云うと花村は眉をしかめて、

「『棒が利く』ってなんのことだ」

と不機嫌そうに言った。どうもテキ屋の花村は、関西弁の吉川がいちいち気に障る様子だ。



「バッティングが良い、って意味です」

立合人の蓮見が利口ぶる。

ジャンケンをして水田は最初に、外野でフライを捕るのは上手でも、全く非力で棒の利かない蓮見を採り、二巡目で、今迄に二人殺しているのが自慢の強肩のキャッチャー、殺人犯山田を採った。そして三巡目で、花村と吉川が全くノーマークにしていた青森刑務所懲役オールスターの三浦を指名して驚かせた。

「順チャン。三浦ってあの冴えないチビだろ。変だな。何かこれは情報だな」

花村は、細い目を疑わし気にもっと細めて痺味を付け、蓮見の顔を睨み付ける。

長身だが、覚醒剤の打ち過ぎの名残りのため、血の気のうせた茶色の顔で、しかもガリガリに痩せている鈴木は、これも全く注目されず、四巡目で急に、水田は自分のチームに指名出来た。

五巡目に、同じ東京の博奕打ちで、水田の大先輩に当る、もう気ばかり焦っても、まるで身体が動かず、しかし自分のチームに入ればライトでラストを打たすわけにも行かないので、監督達が敬遠する、五十九歳の組長を水田が指名すると、

「流石でんな。これが渡世人の美しさ言うもんでっせ」

と、吉川は無邪気に嬉しそうな声を出してしまったのだが、花村も内心、誰がババを引くことになるのか、と吉川と同じ想いだったのに違いのないだが、そこが年功の差で、無表情を崩